

NPO JCP NEWS

No. 23 · 2011. 3.15

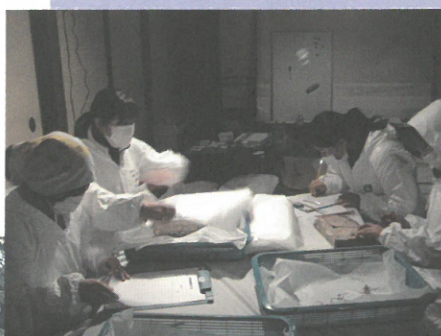
- ・ 韓国文化遺産スタディーツアー〈南部篇〉 開催報告
- ・ 和紙の里探訪～紙漉き現場見学ツアー 第Ⅱ弾 開催報告
- ・ 平成22年度 「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」レベルⅡ 開催報告
- ・ 会員の声 JCPによる「青年海外協力隊文化財保護分野技術補完研修を受講して」
- ・ 書籍紹介 『文化財赤十字の旗』
- ・ JCP事務局通信



韓国文化遺産スタディーツアー〈南部篇〉
世界遺産 安東下回村（ハフェマウル）



世界遺産 海印寺（ヘインサ）民族衣装でのセレモニー。



「文化財保存修復専門家セミナー」レベルⅡ
調査と処置



市田邸正面玄関



和紙の里探訪
～紙漉き現場見学ツアー 第Ⅱ弾



久保田彰様工房にて

平成22年10月8日(金)～12日(火)に催行された世界遺産スタディツアーは、平成19年に引き続き、再び韓国を訪れました。今回巡ったのは釜山、安東、慶州、金海など。南部篇とは言え訪問先は広範囲にわたり、それぞれの風土と文化、景観を楽しむことができました。

講師は三輪嘉六理事長を筆頭に、沢田正昭理事、西浦忠輝副理事長という豪華メンバーです。参加者は19名。常連さんも増え、JCPのスタディツアーは益々充実してきました。

今回のツアー企画では、東亜大学博物館の朴成澤様に大

変お世話になりました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。また、一行を特別にお迎えくださった国立慶州博物館館長様、国立金海博物館館長様に心より感謝申し上げます。また、こんなにも自由な団体に最後まで笑顔を決めさずお付き合いくださったマゴスツアーのイ・ソヨンさん。本当にありがとうございました。美しい笑顔、いつまでも忘れません！

今回は、参加者の中からお二人の方にレポートをお寄せいただきました。

韓国スタディツアーに参加して

三恒商事株式会社 里井 和行

一昨年の敦煌、昨年の韓国とスタディツアーに参加させてもらいました。

思えば敦煌は夢とロマンの中に有る歴史の世界でしたが、韓国は身近な歴史の接点という意味合いで面白い文化の世界でした。

日本の歴史博物館は大きな一つの歴史を場所や時代で分担して様々に展示しているという見かたをすれば、韓国の博物館は別々の歴史を展示し、それらが集まって一つの韓国という歴史に纏められてゆくのだらうと思いました。

多分世界中の国々の歴史の大半がそうだろうと思うと、日本の恵まれた歴史文化の特殊性を認識させられた貴重な

旅になりました。

後は邪馬台国以前の韓国と九州の関わりなど興味深い歴史のテーマなども私の中に浮かび上がって来ました。

参加された方々も以前からの参加者が多く、気心の知れた楽しいメンバーでしたし、なかなかこれだけレベルの高い方々の揃ったツアーは少ないだろうと思います。

最後になりましたが、引率の先生方の長年にわたるご指導ご努力のおかげで、各地で好意に満ちた歓迎を受けることができましたことは、喜びとして深く私たちのこころに残っております。

先生方並びに事務局のみなさん、ありがとうございました。

「韓国文化遺産スタディツアー 〈南部編〉」に参加して

田中 寿子

数年前の「韓国文化遺産スタディツアー 〈北部編〉」に参加して、〈南部編〉を楽しみにしていました。ソウルを中心とした北部編でも、個人では1回の旅行で1カ所行けるかどうかという文化遺産を何箇所も巡ることができました。南部編を楽しみにしていたのは、雑誌『芸術新潮』の韓国特集で紹介されていた南部のお寺の写真、添えられた近所の風景や人々のスナップショットが素晴らしかったからです。そして、その記事を熟読して……ということになればよかったのですが、ざっと読み返して当日を迎えてしまいました。

釜山に着いてから、バスでの移動時間が長く予定されていて、退屈するかなあと心配でしたが、とろとろ眠っていました。ときどき、目を覚ますと、深い森や雑木林、黄金色の田畑が見え、それは初めて見る風景でありながら、夢



10/9(土)：世界遺産海印寺(ヘインサ)【陝州】
韓国三宝寺刹の一つ。八万大蔵經を所蔵し、大蔵經板8万枚を収蔵する蔵經板殿で有名。



10/9(土)：浮石寺(フソクサ)【榮州】



2日目に宿泊した民宿「安東臨瀛閣正枕君子亭」。かつての両班の屋敷を民宿に転用している。



10/10(日)：慶州国立博物館のバックヤードを見学させていただく。



10/10(日)：大陵苑 天馬塚。【慶州】古墳から天馬を描いた馬の泥除けが出土したことに由来する。その他金冠や腰帶など1500点が出土している。



10/11(月)：世界文化遺産 石窟庵(ソックラム) 寿光殿修復のため寄進するJCP理事長と副理事長



10/11(月)：世界文化遺産 仏国寺(ブルグッサ)



10/11(月):東亜大博物館
日本占領期の1925年に慶尚南道の道庁として建てられ、朝鮮戦争(1950~1953年)の際には臨時首都政府庁舎として使われた建物。2002年に東亜大学に買い取られ、博物館として利用されている。建物自体にも価値があり、2002年9月、登録文化財に指定されている。博物館としても第1級の収蔵品を誇る。



10/12(火):大成洞古墳博物館
【金海】にて記念撮影



10/12(火):金海博物館
館長様にお出迎え頂きました。

の続きのようでもありました。

お寺は山の上にあります。バスを降りて、山に開かれた道を登っていく道中がまた良いものでした。木々の葉が厚く覆いかぶさる坂を、そのときどきに近くにいるツアーの

人たちと、時には三輪先生や沢田先生、西浦先生と話しながら歩いていく時間も、このツアーならではの楽しみです。

どこのお寺だったか、その山のふもとにりんご畑には小ぶりの実が赤く色づいていました。道沿いにりんごを売る人もたくさんいて、食べてみたいものと思ったら、モルゴス先生が1箱買われて、みんなに1つずつ分けてくださいました。固くて、甘酸っぱい、見たままの味でした。

伝統的韓屋ホテルに泊まったことも、とても印象深い体験でした。泊まる部屋は、オンドルで、お風呂もトイレもないのですが、まったく家具調度が置かれていなくて、おふとんだけが置いてありました。ホテルというより宿という感じで、家族でお世話をしてくれましたが、寡黙なご主人が出してくれた朝ごはんは、とても美味しかったです。

今回、訪れた地方の自然の奥行き、色の濃さに打たれました。秋の実りの時期に、お天気にも恵まれてその自然に抱かれて、韓国の人々、その文化の中で長い間守られてきた文化財を見て、その場その場で、現地の専門家のみなさんの興味深いお話を伺い、分からないことは先生方に質問すると教えていただくことができ、なんとも贅沢な旅となりました。主催者、関係者のみなさま、そしてツアーに参加されたみなさまに心から感謝申し上げます。

和紙の里探訪 ～紙漉き現場見学ツアー 第Ⅱ弾

昨年から始まった紙漉きの現場を訪ねるツアーは、好評にお答えして今年も催行することとなりました。今年の訪問先は、山陰・中国地方です。山口県に始まり、石州・出雲地方を経由して、最後は岡山県までの長距離を、2泊3日で移動しました。

講師は去年に引き続き、増田勝彦先生(昭和女子大学大学院教授)です。

今回の参加人数は13名。講師、スタッフを入れて16名と少人数でしたが、工房をゆっくり見学させて頂くには、ちょうど良い人数でした。

参加者の多くは、国宝修理装こう師連盟所属工房からの

参加でした。同連盟は、現在日中韓の共同研究で和紙のデータを集積しており、その取材も兼ねた参加でした。

訪問先は7工房。いずれも水のきれいな山間部に位置しているため、毎度のことながらバスの運転手さんにはご苦労頂くことになりましたが、現場で聞く解説は、ひとつひとつが実感として伝わり、とても印象的なものでした。

時には道を間違えて、大幅に遅刻してしまうようなアクシデントもありました。朝早くから待っていて下さった工房には、大変ご迷惑をおかけいたしました。また、繁忙期にも関わらず、暖かくお迎えくださったそれぞれの工房に、この場をお借りしてお詫びと御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

今回は、ツアーに参加された2名の方からレポートを寄せていただきました。

和紙の里探訪～紙漉き現場見学ツアーに参加して

九州国立博物館 秋山 純子

昨年同様、今年も参加させて頂きました。昨年は大学の非常勤講師をしていたので、授業で文化財の保存、活用、修復の話をするに当たって自分の目で文化財を支える和紙、特に修復に使われる和紙がどのように作られているのか確かめることが目的でした。修復に使用される和紙を製作している所ばかりでしたので、少しでも悪影響を及ぼさない和紙を製作するという真摯な姿勢が非常に印象的でした。

今年は立場が変わり、九州国立博物館という文化財の保存・活用を進めていく職場に身を置くものとして紙漉きの



千々松製紙所 千々松哲也様(山口県山口市)〈徳地半紙〉



石州和紙会館にて 久保田彰様(島根県浜田市)〈石州半紙〉



左:井谷伸次様(島根県雲南市)〈斐伊川和紙〉 右は増田勝彦先生



技術も後世へと伝え残す必要がある、そのためには今、紙漉きが行われている現場を記録することが大切だということで参加を決めました。今回見学させて頂いた紙漉き場の様子は昨年とは少し違っていました。補修紙に特化しているわけではないため、紙や漉き方が個性豊かであるという印象でした。漉き方、使用している材料の違いなどを詳細にまとめていけば、地域性、紙漉き場同士の関係性など見えてくるのではないかと思います。また、ただ漫然と紙を漉いていけば続いていくという状況ではないので、紙漉きの技術や和紙を存続させるため、それぞれに並々ならぬ努力と創意工夫をされていました。ですから、丁寧に漉かれた和紙自体にも個性があり、非常に興味深く拝見いたしました。

今回、現在の紙漉きの実情を記録するためビデオ撮影をしました（うまく撮れていると良いのですが……）。早くビデオに収めることを了承してくださいました各紙漉き場の方々にこの場を借りて感謝申し上げます。またビデオ撮影の際に参加者の皆様には多大なるご迷惑をおかけいたしました。ここにお詫びいたします。

紙漉き現場見学ツアー第2弾参加後記

（有）山領絵画修復工房 川村 朋子

昨年も暮れの押し詰まった中、前回に引き続き、増田勝彦先生率いる紙漉き場見学ツアーに参加した。前年度の美濃・加賀・越前から中国地方に場所を移し、総勢16名のグループで7軒の工房を見学させていただいた。訪れた土地柄と紙漉き場の雰囲気、少人数であったこと、参加者の殆どが装こうの方であったことなど、全体として前回とはまた違った趣の旅行となった。

今回のテーマは、①楮紙以外の紙を見る（前年度は楮紙中心） ②漉きかたを比較して見る（中国、韓国に比べ日本では地理的に狭い範囲で多種多様の漉き方をする）の2点だった。増田先生が「自分が行きたい所」と仰った7工房は、果たしてそれぞれが明確な特色を持ちあらゆる面で異なった環境・雰囲気、魅力的な所ばかりであった。

1軒目にお訪ねした千々松さんは、増田先生が「流し漉きのスタンダード」と仰る紙漉きさんである。紙の性質は原材料・加工法・懸濁液の状態・漉きかた等すべての工程が総合的に作用して決まるという思いが強く、これまで私は流し漉きの中の「かた」に特別意識を向けようと思ってみたことがなかった。しかし今回テーマに沿って、千々松さんの工房を初めに見学させていただいたことで、「かた」に注目することの意義と、自分が今見ているものが一体何なのかよく理解できたと思う。漉きかたに注目して見始めると、漉き桁や簾との関係、懸濁液との関係、原料との関係、煮かた、塵より、叩解……、それぞれの噛み合いかと漉き場ごとの違いが、よりはっきりと認識された。

ほかでも紙漉き見学や紙作りをさせて頂いたことがあったが、これまではまだ、本物を見ているという漠然とした高揚感だったろうか、仕事の大変さ、緻密さ、漉き手の方々の情熱、使い込まれた道具の色気、紙の美しさにただ



西田和紙工房 西田誠吉様（中央奥）
（島根県浜田市）〈石州和紙〉
石見神楽の大蛇（おろち）を製作する和紙も生産している。



安部信一郎様、紀正様。（島根県松江市）〈出雲民芸紙〉



広瀬和紙製作所 長島勲様（島根県安来市）〈広瀬和紙〉

上田手漉和紙工場 上田繁男様（左から二人目）〈岡山県津山市〉

ただ感動していた。そこから漸く意識が分化し、見たものを消化して自分の中に引き出しを作るところまで来たような気がする。そうすると、「漉き場を数カ所見たからといって紙はこうやって漉くものと言うことはできない」と増田先生が仰るのがよくわかる。そしてこのことは、漉き手の考え方や漉き場の規模・経済的状況等についても言えるだろう。

修復の仕事をしていると手漉き和紙は毎日目に入る。ましてや西洋手漉き紙に比べれば和紙は確固として続く伝統産業で、世界中の修復で使われている重要な材料である。身近であるだけに逆に、この紙の作り手が年々減っているなど信じられない錯覚に陥る。しかし時代とともに私たちの住まいかたが変わり、和紙を使う場面も量も昔とは違っている。そんな中訪れたいずれの工房でも、各々が各々の方向で存続の道を探り、今という時代に合わせながらよい物を守ろうとしている意気込みが感じられたことは大変頼もしく、そういった紙を日々使うことのできる同じ日本人であることが嬉しく思えた。

千々松さんがご自身の漉き方について「こうすると塵ヨリの手間を省いても大丈夫だから楽でしょう」と笑いながら、あとで仰った「紙漉きはどんどん減っているけれど、それでも現在紙漉きが残っている産地というのは、みな手のかかるやり方で煮たりそぶったりしている。だから残っているのだ。簡単に白くするやり方は、紙が脆くなって、その産地自体が廃れる方向にある」という言葉は真を得て重く、他の紙漉き場を回っている間も頭から離れなかった。

頻繁にはない電車とバスを乗り継ぎ、タクシーを予約し、歩いて紙漉き場へ見学に訪れた経験から、この企画のありがたさを痛感しております。催行してくださいましたJCPの皆様と、工房の方々の貴重なお話を引きだし有意義な時間を作ってくださいました増田先生に深くお礼申し上げます。

「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」レベルⅡ・Aコース開講

3年目を迎えた標記セミナーは、22年度で44名がレベルⅠ修了しました。その内の12名を対象に、より実践的
技能の習得を目指す「レベルⅡ」を、いよいよ開講することになりました。レベルⅡもニカ年連続コースとなります
ので、22年度はその第1年目（Aコース）になります。

レベルⅡでは、Ⅰでもお世話になった「NPO法人 たい
とう歴史都市研究会」が管理する伝統的日本家屋 市田邸
（登録有形文化財）をフィールドとして、同家の蔵の床下
に長年仕舞われてきた古文書約300点を取り上げ、調査し
つつ、保存の方法を検討するという形を取りました。西村
慎太郎先生（国文学研究資料館准教授、NPO法人歴史資
料継承機構代表理事）、三浦功美子先生（東北芸術工科大
学准教授、装こう技術者）の指導の下、受講生が1点1点
丁寧に取り上げ、埃払いなど簡単な処置を施し、分類整理
して薄葉紙に包むところまで行いました。

平成22年度 「文化財保存修復専門家養成 実践セミナー」レベルⅡを受講して

鈴木 美賀子

私が保存修復の勉強を始めたのは、家の倉庫に放置して
ある伊勢型紙を何とかしたいという気持ちからでした。先
祖が紺屋を営んでいたことから、我家には古い物が多くあ
ります。また、かつては冠婚葬祭が家で行われていたため、
行事用の漆器や陶器といったものが必需品で、そうしたも
のは蔵に収められていました。しかし商売を止め、生活様
式が変化した今、古い物は全く顧みることがなくなってし
まったようです。私が知る限り、老朽化が進んだ日本家屋
は殆どが建替えられ、蔵は取り壊されています。こうした
時に、古いものは大量に廃棄されるのです。学術的、歴史
的に重要な物ではないかもしれませんが、自分達のルーツ
が失われてしまうような一抹の寂しさを感じます。

セミナー参加は長期の東京滞在となるため受講を迷いま
したが、実際に蔵の調査を行うと聞いて参加を決めました。
それは東京国立博物館近くの市田邸において、蔵の床下
にある古文書の調査というものでした。参加者の方々は、私



作業をする鈴木美賀子さん

のように日本画
関係の他、装こ
う、考古・埋蔵
文化財、書跡修
復等、様々で、
自分と違う分野
の話を聞けると
いうことは大変
興味深いこと
でした。特に日頃

今回得がたい実習の場を提供して下さいました、たいと
う歴史都市研究会様、市田善兵衛様に心から感謝申し上げ
たいと思います。また指導を頂いた西村先生、三浦先生、
山崎祐子先生（学習院女子大学／白百合女子大学非常勤講
師、民俗学）、中村文美先生（もば建築文化研究所、たい
とう歴史都市研究会副理事長）、椎原晶子先生（東京藝術
大学非常勤講師、たいとう歴史都市研究会副理事長）、カ
リキュラムの企画構成に多大な力をお貸しくださった神庭
信幸先生（東京国立博物館学芸研究部保存修復課長）に、
改めまして厚く御礼申し上げます。

今回は、12人の受講生の内から、2名の方に参加レポ
ートをお寄せいただきました。

※この事業は、芸術文化振興基金、（財）文化財保護・芸術研究
助成財団の助成金を得て行われています。



市田邸蔵の床下に眠る古文書



劣化した古文書の様子

修復の仕事に携わってみえる方からは、物の扱い方、修復
に使う道具のことなど学ぶ点が多くありました。

カビと埃にまみれた古文書の山を見た時は、正直、驚き
ました。原型を留めないもの、上下が貼りついているもの、
土の上に長年置かれていたため、土と同化して崩れかけた
ものもあったのです。西村先生、三浦先生のご指導のもと、
皆で話し合い、少しずつ引き上げ、クリーニングを行うこ
とになりました。また、古文書の多くは帳簿で、市田さん
のお店が東北地方と多く取引があったことなどが分かりま
した。

今回のセミナーでは修復の段階まで至りませんでした
が、資料の取出し、クリーニングなどの作業を体験するこ
とができました。その後、調査で分かったことを展示発表
すると聞き、文化財保存には多くのプロセスがあり、修復
はその一部なのだ実感しました。

古い物が失われてゆくのも事実ですが、先生方をはじめ、
事務局の方、たいとう歴史都市研究会のボランティアの
方々、建物を提供して下さいている市田さんと、多くの方
の文化財を守ってゆこうという姿勢に勇気づけられたセミ
ナーでした。これを機会に少しでも保存修復への理解を深
め、文化財保存の輪が広がることを期待しています。

文化財保存修復専門家養成実践 セミナー・レベルⅡ感想文

大東文化大学 丁 成東

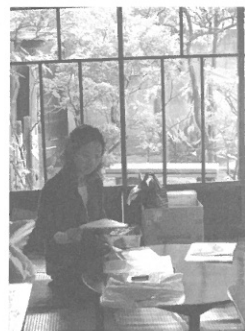
2010年11月15日（火）から21日（日）までの一週間、上野桜木の市田邸で開いた「文化財保存修復専門家養成実践セミナー・レベルⅡ」を受講させて頂きました。過去の2年かけて理論を中心としたレベルⅠと比べてみると、今回のセミナーはまさに実践をメインにしたセミナーだと言えます。

受講の内容は、市田邸の蔵の床下に百年間に亘って収納されてきた文書類の塊の整理や、安全な保管法に移すことでした。これらの文書類はカビ、虫損、湿気など原因によって紙が劣化し、「作業」の難易度が非常に高かったと思いました。これまで工房で見学したり、研修をした経験がありますが、このような「原始」状態の文書類の塊は文化財保存修復の研究者と技術者を狙っている私には見たこともありませんでした。

セミナーのなかで、最も深い印象を残したのは、西村・三浦両先生が、十二人の受講生が文書を取り上げる班、表題の記録班、クリーニング班に分け、各班の受講生たちが文書の整理保存について、自身の知恵を働かせながら、対象物の歴史的な理解、状況の把握、保存の計画、実践的な作業なども多く考えさせられるよう指導して下さったことです。最後、両先生が最善策をまとめて頂き、そして非常の場合も臨機応変の処置を取るということが重要だということをお教わりました。その他には、積まれた状態の文書を蔵の床下から取り上げる作業は、私としてもとても新鮮な作業でした。先生の指導の下で数冊ずつの塊が慎重に取り上げられ、対象物を順番に撮影するばかりではなく、現



西村慎太郎先生（左）、山崎祐子先生（中央）、三浦功美子先生
中村文美先生（右）



クリーニングと調査が終了した古文書は、薄葉紙で包んで分類ごとにテンパコに納め、保管。



作業をする丁成東さん（右）

状記録調査カードにスケッチをしました。

一週間のセミナーは寒かったですが、非常に充実した日々でありました。セミナーを通じて日本には文書類の文化財が中国より数多く残されているため、研究と修復の環境は非常に恵まれていると感じました。そして文化財保存修復に対する考え方および歴史文化を一層理解できました。最後に、今回の実践を中心にするセミナーは非常に魅力的に感じ、また多くの課題ができましたが、次回のセミナーを引き続き頑張りたいと思います。

会員の声

JCPによる「青年海外協力隊 文化財保護分野技術補完研修を受講して」

加藤 里英（JCP会員）

青年海外協力隊には稀にですが文化財保護分野の募集があります。昨年の春、この分野のボランティアに応募したところ条件付で合格しました。条件をクリアすれば今年の夏にはアフリカ・タンザニアへ赴任し、同国、キルワ・サイト事務所で任務が開始します。キルワには14～17世紀頃のモスクや18～19世紀の奴隷貿易等の遺跡がある世界遺産があります。現地でのお仕事ですが、以下が募集表に記される業務内容です。

- ・キルワ・キシワニとソング・ムナラの2つの島の文化、自然遺産の保存計画の作成と実行
- ・キルワ・キシワニとソング・ムナラの2つの島の海水による侵食に晒されている地区への対策
- ・各世界遺産サイト個別の訪問者に対する安全対策
- ・環境保全対策の調査と評価

・キルワ・サイト事務所の技術スタッフの指導

元々、私は愛知県美術館で学芸員さんのアシスタントとしてドキュメンテーションや展示のお手伝いなどをしていました。文化財を扱う職種とはいえ、世界遺産とは無縁の私がいきなり発展途上国の、しかも危機遺産リストに登録されている世界遺産へ赴き上記のようなお仕事をすることに対しJICAの面接官は不安を覚えたのでしょうか。技術力が不足している2次試験合格者のみに行われる「技術補完研修」というものに参加し合格すること、それが隊員となる条件の1つとして付け加えられました。

そこで今回、この研修をJCPにコーディネートして頂き2011年1月11日から25日間、国士舘大学を中心に研修を受講してきました。「こんな大御所の先生方を一カ月間独り占めするなんて、普通ありえないよ」といわれる豪華な研

修です（今回の文化財保護分野の派遣者は私1人なので、研修参加者も私だけでした）。

研修のカリキュラムですが、世界遺産保護海外で活動するときの心構えから保存科学まで幅広く学ぶことができます。例えば、

- ・常に基本に立ち返るための文化財保護基本哲学や心構え
- ・現地で尋ねられるであろう日本の文化財保護の歴史や制度・事例、世界遺産の仕組みや問題点
- ・国内外で行われた遺跡や壁画保存の実例
- ・保存技術について保存科学を交えた解説
- ・海外で文化財保護の経験をされた方からの現地の実情など、紙面の関係上、大まかにしかご紹介できないのが残念です。

講義の中には実際に遺跡保存の現場へ足を運ぶこともありましたし、色々な事例を学べるシンポジウム参加などもありました。勿論、シンポジウムも現地講義にも先生と一緒に同伴してくださり、先生の解説がつきます。今回、6人の先生方に講義をしていただいたのですが、すべての先生に濃厚な講義をしていただけたのは勿論、親身になって私の赴任後の事も心配してくださり、有用なアドバイスも頂きました。経験豊富な頼りになる先生方とお見知りおきになったのもJCPコーディネートの研修の特徴だなと思いました。他職種で技術補完研修に行った同期の話聞いても、ここまで充実した研修はあまりないようです。

マンツーマンで、あるときは先生方2人と生徒1人でみっ



西浦副理事長に研修を受ける加藤さん

ちり行われるこの研修、お昼休みは先生のご専門の裏話をお聞きすることもでき、貴重で濃密な時間を過ごすことができますが、決して楽はできません。ですが、できればこの研修、もう一度を受けたい、素直な感想です。

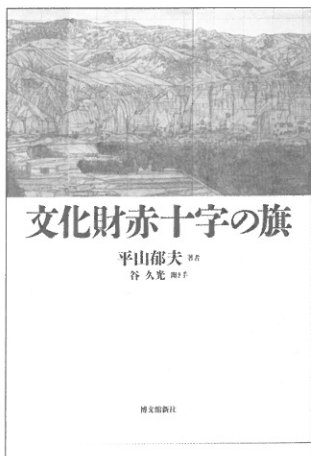
赴任後、さまざまな場面で多くの困難が待ち受けていると思いますが、その度にこの研修を思い出し、顔を上げて前へ進もうと思います。それだけの力を与えてくれる研修でした。

素養の無い私に怒ることもなく、熱心に教えてくださった先生方、この研修を通して知り合えた方々、この機会を与えてくれたJICA、そしてこの研修を組んでくださったJCPに感謝いたします。

書・籍・紹・介

『文化財赤十字の旗』

著 者 平山 郁夫
聞き手 谷 久光
2011年1月25日 発行
博文館新社
定価 1700円 + tax
248ページ A5判



平山郁夫画伯と言え、特に芸術に関心がない人々の間でも、よく知られた名前である。文化財の世界に身を置く人間であれば、画伯が提唱された「文化財赤十字」構想を知らない者はないだろう。ではしかし、画伯がどのようにこの理念を構築し、具体的にどのような行動を起こしてきたか、知る人は意外に少ないのではないだろうか？

この書は、朝日新聞社会部記者を経て、画伯が設立した（財）文化財保護振興財団の事務局長、専務理事を歴任、平山夫妻の近くで長く行動を共にしてきた谷久光氏による聞き書きを編集したものであり、画伯の足跡の集大成である。1997年に芸術新聞社から出版された『平山郁夫の文化

財赤十字』に、このたび画伯の逝去を機に加筆、再刊されたものである。

画伯の活躍の場として、まずシルクロード、敦煌が思い浮かぶが、やがて支援の対象はアメリカのフリヤ美術館・ポーランドの国立東洋美術館が所蔵する日本古美術品の修復、アフガニスタン・カンボジア等の遺跡保護へと展開していく。

文字にすれば簡単だが、国境を越えた支援は、実は大変な意志と並外れた行動力、そして高度な交渉能力が必要とされる。何故なら、ことは相手国の主権の問題であり、そこには各国の政治制度や習慣の壁が横たわるからだ。日本国政府を以ってしても容易に突破できない壁を、画伯は何と民間人として越えてしまうのである。あらゆる機会を捉え、要人に会い、ぎりぎりの瞬間まで諦めずに説得を試みる。その迫力に、冒頭からぐいぐいと引き込まれた。勿論善意や情熱だけではない。幼少から培われた深い教養が、高度な判断力を働かせているのである。

画伯は2009年12月に、79歳にしてこの世を去られた。正に巨星墜つの感があった。日本は決して画伯が点された灯を消してはならないと思う。「平山郁夫の文化財赤十字」と合わせ、是非ご一読を願いたい。

※ ちなみにインタビュアーの谷久光氏は、2007年から2年間に亘り、当機構の理事兼事務局長を勤められた。日本記者クラブ会員であり、今なお東京新聞などの誌面に健筆を振るわれている。今後のご活躍を、心よりお祈り申し上げます。(M.Y)

ご入会ありがとうございました。

(平成23年3月1日現在入会者数)

■理事	10名	■維持会員	7名
■登録会員	173名	■一般会員	85名
■学生会員	51名		
■監事	1名		
■専門評価委員	1名		
■評議員	1名		
■賛助会員	30件		
株式会社	宇佐美松鶴堂		
株式会社	宇佐美修徳堂		
株式会社	岡墨光堂		
株式会社	桂文化財修理工房		
財団法人	元興寺文化財研究所		
京都造形芸術大学	日本庭園・歴史遺産研究センター		
共同精版印刷株式会社			
共和コンクリート工業株式会社			
国富株式会社	長崎営業所		
株式会社	芸匠		
株式会社	光影堂		
一般社団法人	国宝修理装こう師連盟		
株式会社	坂田墨珠堂		
株式会社	修美		
株式会社	松鶴堂		
宗教法人	正法院		
中部資材株式会社			
株式会社	東都文化財保存研究所		
日本通運株式会社	美術品事業部		
株式会社	半田九清堂		
長谷川 聡			
百元 節			
株式会社	フレンドトラベル		
株式会社	文化財修復技術研究所		
株式会社	文化財保存		
溝川商店			
山領絵画修復工房			
他 個人3名			
(アイウエオ順)			

NPO JCPの活動に

参加してみませんか？

■登録会員：年会費 7,000円

文化財保存に関わる専門的技能を持ち、プロジェクト遂行に協力する個人。

登録会員は文化財の保存事業を行うための専門家で、文化財に直接関わる専門家とは限りません。

■一般会員：年会費 5,000円

この法人の目的に賛同し、支援する個人。

■賛助会員：年会費 一口50,000円

この法人の目的に賛同し、支援する団体、個人。

■学生会員：年会費 3,000円

大学または大学院に相当もしくは準じる教育機関の学籍を持ち、この法人の目的に賛同して入会する個人。

会員特典

- ・季刊情報誌の送付
- ・講演会/研修会等への優先参加

※入会ご希望の方は、下記のファックス、お電話、メールにて申し込み用紙をご請求下さい。おり返し資料をお送りいたします。また、ホームページからでも入会申し込みができます。

TEL. 03-3821-3264 FAX. 03-3821-3265

E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org

URL: www.jcpnpo.org

※この他にも、随時寄附を受け付けております。下記の郵便振替、あるいは銀行口座をご利用ください。

・郵便振替 00120-4-10545 NPO JCP

・三菱東京UFJ銀行 四谷三丁目支店

普通預金 3960340

特定非営利活動法人 文化財保存支援機構

理事 三輪嘉六

・みずほ銀行 根津支店

普通預金 1727893

特定非営利活動法人 文化財保存支援機構

NPO JCP NEWS

第23号

2011年3月15日発行

特定非営利活動法人 文化財保存支援機構

〒110-0008

台東区池之端4-14-8 ビューハイツ池之端102号

TEL: 03-3821-3264 FAX: 03-3821-3265

E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org

URL: www.jcpnpo.org

関西支部

京都造形芸術大学

日本庭園・歴史遺産研究センター内

TEL: 075-791-8519

〈理事〉

三輪嘉六 (理事長)

大林賢太郎 (副理事長) 西浦忠輝 (副理事長)

伊原恵司 白井久明 増澤文武

荒木伸介 沢田正昭 増田勝彦 三浦定俊

〈本部事務局〉

八木三香 (事務局長) 松本洋子

〈関西支部事務局〉

伊達仁美 (事務局長) 加藤亜沙子

〈編集協力〉

嶋根隆一 (伝世舎)